

嫌いなセフレにトラウマを植えつけるための罠を張ったら、見事に自分が地雷を踏んだ

体験版

受け:村井

攻め:仙波

要素:媚薬、拘束、射精管理、玩具、ローションガーゼ、スペンス乳腺、胸責め、ドライオーガズム、潮吹き、イキっぱなし、シャワー責め

忌々しいあの男に連絡先を知られてしまってから1か月。俺は毎日のように鳴る変態からの呼び出しに頭を悩ませる日々を送っていた。ソフトな触れ合いが続くならまだいいが、奴とのセックスは毎回ハードモード。鞭で打たれたり、監禁されるといった危険なプレイは今のところないが、これ以上出ないくらいに搾り取られるのが問題だ。

何とかこの生活から脱却したい。というか仙波断ちしたい。まあ、それが簡単にできれば苦労しないという話だが。

とは言っても、身体的負荷が重いのは間違いない。どうにかあの変態を撃退する方法はないものかと、俺は普段利用することがない本屋に足を運んだ。ここになにかヒントでもあればと、藁にもすがる思いだ。そして俺は入口近くの棚で一冊の本、「彼を骨抜きにする10のテクニック」を手にとった。参考になるような、ならないような恋愛の駆け引き方法が勉強になった

が、これといって使えそうなものはなさそうだなと思ってページをめくった、7つ目のテクニック。

「遠慮ばかりしてちゃダメ！たまには自分から誘ってみよう！」

この言葉にピンと来たので、俺はその場で奴に電話した。暇にしているのかいつもほぼワンコールで電話に出るあたりも気持ち悪いが、今日に限っては好都合。

「村井君！珍しいね、君からの電話なんて」

「ん～、なんか声が聞きたくなってさ」

言っている自分も寒気がするリップサービスだ。しかし遠慮してはいけない。この駆け引きには、積極性が必要だ。まるで愛しい恋人にでも話すように、甘えた声を出してみる。

「明日とか、時間あったりする？」

「夜8時くらいからなら」

「そっか。そしたらさ、明日はホテルじゃなくて、俺んち来ない？」

俺からの突然の誘いに、電話口の相手はたいそう喜んでいた。それに俺も大いに喜ぶ。そうだろう、俺から誘うことはおろか、家を教えたこともないのだから。アンタにとっては嬉しいことの連続に違いない。だがこれは罠だ。まんまと引っかかったなと、俺は内心笑いが止まらない。

企み事がバレないうちに電話を切って、明日の準備物を揃えるために街へ繰り出した。

年甲斐もなくスキップをしながら、雑貨もエロいグッズも何でも売っている黄色の看板の店に入り、必要なものを買い込んだ。それを見て高笑いをする俺を数名が振り返って見てきたが、全く気にならない。

見てろよ仙波クン野郎め。

明日こそ、アンタが一生震えるほどのトラウマを植え付けてやる！

「こんばんは、村井君」

「ああ。遠いところ悪かったな」

「全然大丈夫。これ差し入れ」

「ん、ありがと」

チャイムを鳴らした奴を出迎えて、にこやかに手土産を受け取った。お互いの会話はまるで仲がいい二人のようだが、この空気感が俺たちにとっては異常だ。だがこの男は俺が絆されたと思っているのか、部屋に入った瞬間からご機嫌に見える。奥へと案内すると、ここが村井君の部屋かとテンションを上げていた。

しかし、大喜びの彼には内緒にしているが。実はこの場所、決して俺の家ではない。

このいかにも小綺麗でシンプルに揃えました、といった家具が並ぶ部屋は、いわゆるレンタルスペース。本来エロいことに使ってはいけない場所だが、借りるときには黙って借りたので何の問題もなかった。宿泊も込みで明日の昼まで予約した部屋は、一見すると本当に自分が暮らす空間のようだ。

かりそめの部屋だが、俺は今日だけ俳優になると心に決めている。本日が最初で最後の自分の部屋の中、まるでこの住民になったような自然さで、冷蔵庫から飲み物を取り出した。

「なんか飲む？酒？普通のジュースとかもあるけど」

「なんでもいいよ。村井君が飲みたいものと一緒のものをもらおうかな」

「じゃあオレンジジュースにしとくな」

ボタンと冷蔵庫の扉を閉め、あくまでいつもの通りの雰囲気装って棚のグラスを取る。片方には、即効性で超強力な薬を塗りとくったグラスを。

無味無臭で液状の媚薬は、見た目はただの水に近い。だがシンプルな外見とは裏腹に、腰を抜かすほどに効き目が強いので、口コミでは使い過ぎに警告が出る程だ。しかし相手はあの悪魔である。人には危険だが奴には問題ないと思うので、少量でも動けなくなるものをベッタベタに塗ってやった。味は無いと知っているが、念のため誤魔化せそうな味も匂いも濃いジュースを選んだ俺にぬかりはない。

本日はこれを口にして動けなくなった変態を、ちんこだけは気に入っているので満足いくまで遊んで、その後ベッドルームに引きずっていき、用意した縄で手足をベッドに縛って、ディルドをぶち込んで帰る予定だ。俺が先に帰れば、予約時間を過ぎても彼は自分で退出できないので、片づけにきた管理会社の人間に見つかり一生の汚点になるはず。ここまでが「目には目を、ド変態にはド変態の思い出♡サイコパス仙波に生涯のトラウマ計画」のミッション内容だ。

いやはや楽しみだ、これで俺も仙波離れができるというもの。そんな晴れ晴れとした気持ちで、乾杯と言って鳴らしたグラスからジュースを一口飲んだところで、隣に座りながら俺の太ももを気安く撫でてくる奴から声がかかる。

「ところで村井君、気になっていたことがあるんだけど」

「ん？なに？」

「なんで僕は、君の家じゃなくてレンタルルームに呼ばれたのかな？」

「.....あ？」

しかしながら、計画は出だしから急展開を迎えた。あまりにも自然に秘め事に関する核心を突かれたので、俺は一瞬世界がトチ狂ったのかと思ってしまった。俳優になると決めていたにも関わらず、素の声が出てしまう。表情も一瞬崩れたが、俺は無理に笑顔を作ってやりすごした。

「レンタルルーム？なんだよそれ、何の話？」

とりあえず適当な言葉でお茶を濁したが、俺は内心焦りに焦る。いや、待て待て、ここは普通のマンションの一室にしか見えないはずだ、少々違和感があるかもしれないが、見ただけでレンタルスペースだと気が付くには無理があるだろうと。

まさか、カマをかけられたのだろうか。確かにいきなり家に誘ったので、奴が疑いを持っている可能性もある。意外と鋭いな、サイコパスは勘もいいのか、面倒な奴めと心の中で苛立った。けれどここは何とか乗り切らなければいけない。せめてジュースを飲むまでは誤魔化さないとまずい。どうにか逃げきれないかと頭を働かせていると、衝撃は2波、3波と続いた。

「部屋の場所が送られてきたとき、なんか聞いたことある住所だなと思って。来る前に会社のパソコンで調べたんだけどさ。この部屋、うちの会社で管理してる物件なんだよね」

「へ、へえ？アンタが不動産系の会社に勤めてるなんて初耳だわ。でも勘違いじゃね？隣の部屋とかだろ」

「違う違う、絶対この部屋だって。ほら、ここでしょ？」

けろりとした表情の奴から見せられたスマホの画面には、まごうことなきこの部屋の写真が掲載されていた。もちろんホームページには、「ホテルより気兼ねなくくつろげるレンタルスペース。休憩、宿泊に便利」と記載されている。あまりにも早い計画とん挫の予感に、俺は硬直し無言になる。

ふざけんな、こんなアクシデントがあつてたまるか。ていうかアンタも俺の部屋だと思ったふりしてたのかよ、ふざけんなと冷や汗を流しながらも静かにキレる。ぴく、ぴく、と頬を引きつらせて、これはどうやって騙そうと思ったことを隠したらいいんだと頭を悩ませた。そんな折、トントンと左肩を叩かれる。うるさい、俺は今どうやってこの状況を切り抜けるかを考えてんだよと思いながら顔を上げれば、突然キスされ、ジュースを口移しで飲まされた。咄嗟のことで飲み込んでしまったが、口に残るオレンジの味わいに冷や汗の量がどっと増える。

「い、今俺が飲んだのって」

「君が入れたくれたオレンジジュースだけど」

「あゝ あ！？バカが！それに何が入ってると思って――」

と、ここまで口にしたところで、俺は本日最大の失態を犯したことに気が付いた。ああ、もう無理だ、とりあえず今日は逃げてうやむやにになってしまうかと、色々考えることを放棄する。ベッドルームにアダルトグッズが散乱しているが、もうどうでもいい。俺はにっこり笑って、ソファから立ち上がった。

「ごめん！今ものすごい大事な用事を急に思い出したから帰るな！」

「一応ここが君の家のはずだけど？どこに帰るつもりなのかな？」

「細かいこと気にすんなって。じゃ、俺はこれで――」

だがここで更なる悲劇が起こった。用意周到に塗りたくった媚薬の量が多かったのか、効き目が瞬時に現れ、突然足の力が抜けた俺はどちゃりと床に崩れる。もちろん、立ち上がろうとしても上手くいかない。

「...あ？」

「やっぱり盛られてたか。毒見させてよかった」

「ど、くみて」

「さて、それじゃ移動しようか」

言葉すらうまく紡げなくなった俺は、よいせと言って俺の肩を掴んだ変態からベッドルームに引きずられてしまう。そしてベッドに放り投げられても、自分の力ではなかなかうまく動けない。それでも懸命に玄関へ向かおうとしていたら、奴から馬乗りにのしかかれて悪あがきは終了した。

「動けなくなる系の薬だったとすると、君のことだからこの部屋にも仕掛けがあるのかな」

しょうもないところで察しがいい奴は、ごそごとベッドの周辺を物色し始めた。すぐに縄とディルドが発見され、俺は顔を青くするしかない。素敵なものがたくさんあるねと笑いかけられたが、こちらとしては全く笑えないハプニングの連続だ。徐々に迫ってくる笑顔に悪寒が走る。もはや何を言っても無駄と分かりながらも、言い訳をしないわけにはいかなかった。

「や、その、ちが、違う、違うって」

「いいんだよ、遠慮しなくて。こういうプレイがしたくて、僕を誘ってくれたんだよね？」

「な、わけ、ない、嫌だ、やだ」

「さて。それじゃあ村井君の理想のプレイができるように頑張るから、どんなことしようと思っていたのか詳しく教えてもらってもいいかな？」

明らかに俺の計画の片鱗を知っていながら、わざと言ってくるコイツが憎い。しれっと両腕を持ち上げて頭上で縛ってくるあたりも、これからの時間に対する絶望を煽る原因になっていた。

何もかもが明るみに出た以上、俺に待ちうける展開はひとつ。ただし最終到着地は一か所であっても、そのプロセスが何通りもあるのがこのクソ野郎のいけ好かないところでもある。

「あゝ、ッ、も、もお、いい、だろっ」

「何がもういいの？」

「ひっ、う、わ、かって、る、くせに...！」

「残念だけど分からないなあ。例えば村井君が焦らされてるココを、もっと思いきり触ってほしいって思ってることとかは、全然分からない」

「~~~~ッ！」

する、と指の背で性器を撫でられて悶えた。その程度の刺激でも悶絶するほど感度が上がっているというのに、さっきから延々俺の肌を撫でるばかりのコイツも狂っている。はっ、はっ、と荒くなる息を止められない。緩やかに動く手を物欲し気な目で追っては、大して動けもしないくせに、彼の太ももに腰を擦りつけた。

「く、るし、イキたい、イキたい...！」

「出せないのにこんなに硬くして。まだ序の口なのに、今からどうするの？」

「ひゅあっ！！？あぁっ！あ、や、めっ、ほどけ、変に弄んなぁっ！！」

「イケないねぇ、縛られてて。でもほら、今日はそういうプレイがしたかったんでしょ？」

「く、う、ん`~~~~っ！！ち、が、こんなっ、あ、あ` ああああ.....ツツツ！！！」

ベッドルームに連行された俺は、何度も今日の計画を問い詰められた。それでも、俺が口を割ることはなかった。うかつに喋って、同じことをされたらたまったもんじゃないと思ったからだ。そのおかげか、じゃあディルドは一旦おあずけねとどこかに放られた。アレでガンガン責められることも心配していたので、その不安がなくなったことは良かった。だが奴がディルドを使わない理由としては、「僕の方が村井君を気持ちよくできるから」だそう。なんだよその自信は、クソだなと思いつつも否定できないのが悔しい。

そしてムカつくのは、じゃあ道具に頼らない方向なのかと思いきや、縄は普通に使ってきたことだ。縛られたのは頭上にある両腕だけではなく、俺の熱の根元もだった。きっちり縛られているせいで、勃起はできるが射精はできない。ふざけんな、縄なんか使わなくていつも散々焦らされたりイカされたりしてんのに、自分の意志でイケないとか何の拷問だよと思ったが、用意したのは俺だ。なんでミイラ取りがミイラになるみたいな状況になってんだよと、早くも心が折れかけている。

けれども彼が言うように、今はまだ序の口。これから更によくない展開になるのかと天を仰いだ。そしてこの懸念だけは、百発百中で当たる。

「村井君はどこも敏感だし、それを僕がもっと敏感にしたわけだけど。更に上ってのは味わったことがあるかい？」

「な、に、それ」

「気になる？じゃあ今日は、ここをどうしようもないくらい気持ちいい状態にしてみようか」

「んっ！？」

この悪魔の性癖なのか、俺相手にそうなっているのかは知らないが、コイツは肉体開発にお熱だ。そして本日も例にもれず、開発箇所を決めたいらしい。しかし彼は、いつもだったらニッチなところを責めてくるのだが、今回はあろうことか乳首のまわりをつついてきた。

おいおい、俺は乳首も敏感にされたんだぞ、ただでさえ性感帯なところをもっと開発していく気なのか、絶対に遠慮したいと、不自由な体を限界まで捻って拒否を示す。

「や、だ、別にいい、いらない。そこはやだっ」

「嫌よ嫌よもってやつかな？」

だが俺が嫌だと言っても、なぜか彼には了承の返事として受け取られてしまった。どうして真逆の意味で解釈するんだ。コイツの耳には、きっとポンコツ変換機が搭載されているに違いない。いつも通り狂ってやがる。誰か翻訳者をここに呼んでくれ。

はぁ、と涙目のままため息をついた。その表情を楽しそうに眺める変態は、俺の胸のまわりをするする撫でてくる。

「でもあれだよな。村井君って、もう乳首イキは出来たんじゃなかったっけ？だから今日はさ、触らないでもイけるようにしていこうかなって」

「……、いや、流石にそれは無理だろ」

「村井君ならできるよ」

「アンタ俺を何だと思ってんの？」

しかもド変態大魔王は、本日の目標にとんでもないものを設定しているらしい。乳首を触らないで乳首イキさせる、これが今日の到達目標だそうだ。媚薬が入っているとはいえ、それは流石に無理だろうと俺も思う。

けれども俺は、相変わらず忘れてしまうんだ。この人は数多の不可能を可能にしてきた男だったということ。

手始めに彼は、俺の胸の少し下、脇と乳首の間のような場所を撫でてきた。取り立てて自分でも触ったことがない場所だったが、これが意外と気持ちよくて驚く。気持ちいい？と聞かれたのは気持ち悪かったが、そこの刺激だけなら耐えられそうだったので、俺はあえて彼の問いに乗ってみた。

「ん、そこ、なんか気持ちいいかも...」

「そう、よかった。それじゃあじっくり触っていこうね」

「っ、ん、んん...」

すり、すり、とマッサージをするような手つきで撫でられると、じんわり気持ちよさが広がる。これが揉みほぐしだったなら、とても気持ちいいで終わるところだ。手の横のところで摩擦られたり、手のひらで圧迫されると、人の体温が移るので温かくなってくる。はぁ、と熱い息を吐いて眺めていると、乳輪のあたりを中指の爪で引っかかれて、ビクッと腰が浮いた。

「ん、ふうっ！」

「相変わらず敏感でかわいいね」

「っ、か、わ、いく、なっ」

「かわいいよ。感じている姿は特に」

「んぁぁあっ！！」

きゅむ、と両乳首をつままれると、焦らされた分だけ敏感になっていた。大きな声が出たのが恥ずかしくて、自分の腕に顔を押し付ける。それに、ここはあくまでレンタルルーム。防音性は高くはないだろうし、何よりセックスする場所じゃない。あまり騒いだら周りに迷惑がかかるというのも恥ずかしさを高めている。

でも、感じては辛くなると自分で分かっているのに、なぜか一度乳首に触れられてから、胸の下というか、横のあたりも徐々に強く感じてしまうようになった。じく、じく、と彼が触れてくるたびに熱をもつ。ゆっくりと快楽の波が胸の中心に集まりだして、触られる度に背筋がぞくりとするようになってきた。そこも感じるなんて変だと思うのに、彼が小指と薬指をピッタリ当てて圧迫してきた瞬間、ビクンと大げさに身体を揺らしてしまった。

「は、ひいっ！？ん、ああ、あっ、何、なにこれ、や、だ、やだあっ！」

「こら、暴れないの。じっとしていないと触れないよ？」

「やっ、待って、待ってって言ってんだろ！」

「待たない。ほら感じて？村井君の知らないエッチなところ、もっと気持ちよくしてあげるから」

「〜〜〜っっ！！んンンッ！！っあゝ！！は、あ、あ、っっ、やああああだめだめだめっ、ッ、ん、んんゝっ！」

触られれば触られるほど、胸を撫でさすられているだけとは思えない快感が、断続的に襲うように変化をみせる。だが乳首の周りとはいえ、流石に感じ過ぎだ。これは何かまずいと思い始めた俺は、肘を内側に曲げて、胸を隠せるだけ隠した。そのまま横に寝返りをうち、簡単には触れないよう抵抗する。けれど仰向けに戻されて、馬乗りで押さえつけられたので身じろぎ出来なくなった。

抵抗するならきつくしようかと、縛る縄も増やされてしまう。腕を下すことができないくらい、きつくベッドヘッドのところに手首を拘束された。これではもうどうにもできない。嫌だ、もう嫌だと首を振りながら言ってみたが、彼の両手は胸を這いまわる。

すりすり、さわさわと撫でるように触れてくる時もあれば、じっくり圧迫されたり、乳首を刺激しながら一緒に押されるときもある。人差し指で乳首をカリカリと引っかかかれている最中に、曲げた中指や薬指でグリグリ押されると、じっとしてられないくらいの快感がこみあげてきた。何だよこれ、なんで乳首でもないところでこんなに感じてんだよと焦る。説明のできない快感が、頭の中をかき乱していく。胸の周辺で生まれた快楽は、次第に全身へと広がっていった。ビクビクと暴れる腰が物語るのは、彼の指から与えられる快感の強さ。

「んああああ……！！や、やめ、っは、あゝ〜〜〜っ！！」

「気持ちいい？そろそろ高まってきた？」

「くううう……ッッ！！や、やだ、そこもう、っ、あ、あゝ！」

「いいんだよほら、もっと声を出して…？」

「〜〜ッ、や、や、あああああ……！！」

身体をかがめた仙波さんから、ねとりと耳を舐められた。ぶわっと背中いっぱいに広がる悪寒のような快感に、俺の身体が覚醒し始める。

更に刺激を感じやすくなった肉体は止まらない。乳首と一緒に圧迫されたり、指で揉みこまれると、胸の真ん中が痺れて、逃げられない快感が股間に走っていく。出せない先端が、この快楽を放出したいと叫び出しそうだった。その最中で、グリグリと乳首を強く押された次の瞬間。強烈な快感に、頭が真っ白に弾ける。

「っく、ひ————っ！！！」

バン、と上に乗る仙波さんを落とすくらいの勢いで腰が跳ねた。おそらくそれは胸での絶頂の影響で、出せないならと疑似的に身体が動いたのだと思う。びくびく、びくびくと数回痙攣してから、詰めていた息を吐いて、ようやく腰が下りてくる。

「あ、あゝ、は、は、んうううっ！！？」

けれど終わったと思っているのは俺だけで、彼はそうではなかったらしい。ぐ、ぐ、と胸の横のあたりを圧迫して、あの痺れる快感を増強させてくる。待ってくれ、まだイッたばかりだから、そこを押しては過剰に感じてしまうからと、必死に首を振った。

「んあゝっ、あ、イッ、た、今胸で、イッ、あ、イッたってえ！」

「ん？だから何？」

「さ、触らな、ッ、あああ、あゝ、だめだめ、痺れ、っ、おかしい、胸んところおかしいいいっ！」

「おかしいからココも硬くなっちゃう？」

「ひぎいいゝいゝいゝいいっ！！？やああゝあゝああッ！イッ、イッく、んあああああ、だめ、揉むな、あゝ、あう、揉むなあああ.....ツツツ！！」

もに、もに、と横から手のひらで圧迫される胸のところが気持ちいい。なんで気持ちいいのかも分からないのに、バチバチと目の前が弾けてばかりいる。乳首ならまだしも、なんでそんなところがと、回らない頭で理由を探した。けれど原因不明の快感に犯されている中で、奴は俺の熱を太ももで擦ってきた。二人の間に挟まれたその場所は、射精できずに今も勃起したままだ。しかも敏感になっているので、簡易的な刺激でも致命傷になりえる。無理だ、こんなの耐えられないと膝を閉じて抵抗した。

「~~~~ッ！だめだめだめええっ！！無理っ！イケないのに擦んなあっ！」

「なら触る？」

「くふううううっ.....！！や、あ、んんゝんゝンンっ！！」

だけれど毎度毎度上手すぎる手つきで俺を追い込む彼の手で触れられた時、だったら足の方がまだマシだったと痛感した。やさしく精液の詰まった双球を揉まれるだけでも悶絶ものののに、指先で玉を弄びながら手首と手の平を上手く使って竿にまで刺激を追加してくるから厄介

だ。しまいには胸にかぶりつかれて、赤く熟れた乳首を甘噛みされたら暴れるしかないほどの快感が襲ってくる。

きちんと自身が縄で締め付けられて痛いくらいだった。出したい、もうイきたいと、胸での絶頂を与えられ続けて暴走した身体が悲鳴を上げている。こんなにたくさんはいらない。ただでさえ媚薬で敏感になっているのだから。

なりふり構ってられないと、隣人の迷惑もかえりみずに叫んだ。そのくらいどうしようもない感じ方をしていた。だって、胸の横ですら絶頂に至るんだ。性感帯を触られたらイくに決まっている。なのに今、俺の弱点は乳首も熱もいじめられている。相手がこの人じゃなかったら、まだなんとかなっていたかもしれない。だけど仙波さんなんだ。素面の俺でも適うことがない人物。絶対に負ける未来が見えた勝負に、いつも白旗を先にあげるのは俺だ。

「ごめっ、なさ、あああああもお許してっ！！こんなことしないっ！二度としないからあ！！」

「別に僕は怒っていないよ？怒るようなこともされてないしね」

「っ、らい、もおイキすぎてっ……！胸だめ、やだやだ吸うなっ！無理だ、ンンンっ、無理無理、も、イクっ、っぎ、ッッ、あゝ ～～～っっっ！！！」

きつく胸を吸われている時間の間はずっとイキっぱなしになって、ほとんど胸しか責められていないのにもう限界だった。舐められていない方の胸は、カリカリと尖った部分を中指で引っかれながら、余っている手の部分で周囲を揉まれる。そちらも耐え難い快感には違いなくて、思わず腰がうねった。動く腰の中心で縛り上げられた自身は、今もなお彼の手で弄られ続けている。にちゅにちゅと先っぽのところを撫でまわされると、つま先がピンと突っ張って戻せなくなった。

出せない中でイッていた。何度も何度もというよりは、長い時間ずっと。

「んんんゝ ああゝ あああゝ あゝ あああゝ あっ！！！！だすげ、て、も、イきたいっ、出したいいいいっ！！ぎもちいの、終わんな、あ、ひ、いいいやああゝ ああゝ！！！！出さないでイ

クの、終わりたいいいいいっ！助けてっ！死んじゃう、苦しい、イケなくて辛いからあ
あっ！！！」

「まだ中也も弄ってないのに。ちょっと触ったくらいでこんなにして。僕が本気で責めたらどう
するの？」

「っ、っ、許し、て、壊れちゃ、ごめんなさ、もぉイキたい、こんなの無理……！」

「ん〜、まあ僕はまだまだ続けられるけど。村井君がそこまで言うなら、止めてあげてもいい
かなあ」

「ほん、とに？」

「うん、ほんとほんと」

けれど仙波さんは、俺に多少の情が芽生えたのか、止めてやってもいいと言ってきた。いつも
ならここから更に追い込まれるのに、今日はすんなり手を引いてくれるらしい。マジか、この
人にも人の心ってやっぱりあったんだと、俺は恋の駆け引きテクニックが有効だったことを喜
んだ。

しかしあの本は対人間用。宇宙人やサイコパス相手には、そんな小手先の方便などなんの意味
もなかった。故に、彼が俺に提示してくるのはいつも過酷な条件ばかり。

「本当の君の家に、今夜連れて行ってくれるなら。今すぐやめてあげてもいいよ」

その言葉に、俺は火照らせていた頬を瞬時に真っ青にした。それくらい打撃力のある台詞だ。
おいおい嘘だろ、ここでそれ言ってくんのズルいってと顔をそむければ、ぎゅううと乳首を抓
られる。

「くふうううう……！！」

「嫌なの？まあね、別に君が嫌でもいいんだよ？家は分らずじまいけど、このレンタルス
ペースの契約時間が終わるまでこうしてられるし。朝まで村井君といちゃいちゃできるなら
悪くない」

「ッ、ひ、よくない、無理、朝までなんて無理！」

「せっかくだから、このまま胸をたくさんいじめてあげようか。乳首でイキまくって、極限まで感じやすくなったら舐めまわして。イケないまま何時間も責めてあげる。それで村井君が意識飛ばしたら、そこからこの縄をほどいて、イキっぱなしにして起こして。さっきから触ってないけどクパクパ寂しそうにしてるお尻も指で弄ってドライさせてさ。頭真っ白になってるところを朝まで犯してあげるよ」

「う、いやだ、許して、いやだ、いやだ...っ！」

「嫌がってても関係ない。だってどうせ、村井君は動けないし」

「ッ、だ、だめだ、もお胸は、あ、ああああっ！！」

脅迫めいた本日の夜の計画（仮）は、この人にかかればいともたやすく現実になるだろう。言っている傍から乳首責めが始まりかけていてゾッとする。動けないままに延々と好き放題弄ばれるなんて、想像するだけでもおぞましい未来だ。そうなるくらいなら家バレくらい多めに見るべきじゃないかと、俺は一旦今の状況を改善する方向に舵を切る。

「つ、連れてく！連れてくから！だからもうやめっ」

「え〜？その言い方だと、招待感がなくて嫌だなあ。村井君、僕を騙して何しようとしてたんだっけ？反省してる？してるならその言い方にはならないよね？それともあれか、もっといじめてほしいってアピール？」

「ちがっ！んあ、い、いやだっ！もういやだっ！ひ、だめ、ンンんだめだめだめっ！！！」

しかし、俺を追い詰めようとするときの仙波さんは厳しい。徹底的に屈服させに来るせいで、言葉一つとっても甘くない。塞き止められた熱を平然と揉みこんで、乳首を親指で押し込んでくるなんて、今の俺の状態を考えたらできるわけがない。それなのに淡々と感じさせてくるのは、憎らしいほどのテクニックと、心のない彼のコラボによる奇跡だ。だがこれを体感しても、全く嬉しくないのが悲しい。

ぐちぐちと音がしているのは、自分が出した先走り。もう限界です、さっさと諦めましょうと、性器も両手を上げているようだった。

正直なところ、今回はそれほど長い時間犯されたり、焦らされたりはしていないと思う。それでも諦めかけているのは、手と性器を拘束されていてはあまりに分が悪いと判断したからだ。いつもは縛ったりされることはなく、あくまで快感で動けなくなるだけ。だから彼には、俺をガチガチに拘束して犯して言うことを聞かせたいという欲求は、あったとしてもそれほど大きくなかったのだろう。それなのに自らの策にはまって、我が身を追い込んでしまった。最悪だ。自業自得なので、余計に情けない。でもここで一晩中焦らされるなんてごめんだと、俺は涙を流してへりくだる。

「すい、ませ、もうしない、絶対しないから……！俺の家に招待するので、許してください…」

「うんうん、誰にでも気の迷いが起きることはあるよね。それじゃあ今日のことは水に流して、改めて村井君の家にお邪魔しようかな！」

ご覧いただけるなら、全世界に配信したいくらいの清々しい奴の顔である。何だコイツ、なんで笑ってんだ、目の前の泣いてる俺が見えてないのか？お前が泣かせたんだよ、自分の方こそ多少は悪い事したかと思えと唇を噛むが、あまり悔しそうにしていると反省していないのがバレて、えらい目に合うのでほどほどにしておく。

けれども、俺は油断していた。この悪魔がただ単に、場所を変える程度で満足するはずがないと。

「さてと。じゃあ帰りの支度をしないとイケないから、私物は持って帰ろうね」

しぶしぶだが家に案内すると決まったなら、身支度をしてこの部屋を出なくてはいけないと気持ちを切り替えていれば、にこりと笑って、どこかに放っていたディルドを握りしめる奴が視線の先にいた。それを見た瞬間、俺は何かを悟る。くしゃりと顔を歪めた俺とは対照的に、

楽しそうにローションを塗りたくったディルドを孔にあてがうコイツはまさに人ならざる何かなのではなかろうか。

ああ、どうか聞いてくれ、昨日の俺。もっと綿密に計画を立てるんだ。彼の予想の上の上の、その更に上ぐらいまで想定して準備をしないと、取り返しのつかないことになるぞ。例えば入れようと思った玩具が、自分に入れられるようなハプニングが起こったりするかもしれない。だから次やるときは決してぬかるんじゃないぞと、未来から警告を送っておいた。



もじもじと下半身を動かす村井君を抱えながら、アプリで呼んでもらったタクシーに乗ること10分。週末の今日、渋滞も相まって到着まで時間がかかりそうなことは、村井君にとって不利に働くだろう。

それもそのはず。散々焦らして乳首イキさせまくった後、腕はほどいてあげたけど、性器の縄をほどかないままお尻にディルドをハメた。これじゃ帰れないと駄々をこねる彼に入る玩具を出し入れしてドライで一度イかせてから、君を縛ったまま朝まで遊んでもいいんだよと言え、しぶしぶ帰ることを決断したらしい。悔しそうに顔を歪めながら配車アプリを使うさと言ったら、もうかわいくてかわいくて、その場で1発くらいはやりたくなかったけど我慢した。せっかくだから、美味しく仕上げて彼の家でいただくほうが楽しいだろう。

ふ、ふ、と口とお腹を押さえて震える彼は、タクシードライバーから見たら、酔いからくる吐き気を堪えているように見えるだろう。火照った頬も、アルコールによる影響だと。まさか、彼の中には僕くらいのサイズのディルドが入っていて、しかも媚薬に侵されているなんて、想像もできないに違いない。

何とか声を我慢して、家に着くまでバレないようにと頑張っている、村井君の健気な姿が愛くるしい。思わず褒めるために頭ではなくてお尻を撫でてしまったけれど、彼に魅了された結果だから僕の方が被害者じゃなかろうか。

ビクッと身体を弾ませた村井君は、う、と小さい声を漏らした後、急激に顔を赤くした。そのあと僕を睨んで、肘で距離を取ってけん制してくる。触るんじゃないと、声を我慢していなければ罵声が飛んでくるのだろう。きっと今にもイキそうなくらいだろうに、それでも僕に食ってかかるのがたまらない。彼のように、いじめても簡単に落ちない男の子はいい。遊びがいもあるし、何よりこの表情。強気に睨む目が、快感で溶けていく様子と言ったらない。

でも少々腹は立ったので、大丈夫、気持ち悪くない？等と適当なことを言いながら背中や腹を撫でてやった。見えないところで、服の上から性器も撫でる。耐えきれなくなったのか、途中で身体を前かがみにしたあたりがかわいい。運転手から見えないよう、勃起しているのを隠すためだろう。そのせいで突き出たお尻を撫でまわす。がっ腕を掴まて抵抗されたけれど、僕が運転手さんと会話を始めると、後部座席に意識を向けた運転手に気づかれまいと、静かになるのが面白かった。そうだよ、バレたくないよね、こんな場所でイキそうになっているなんてと、内心笑いが止まらない。

それから彼の家に着くまでの約15分、僕は村井君の胸や臀部も含め撫でまくってやった。時々ぐぐっと力が入っては脱力している様子も見受けられたので、おそらく何度かはイッたのだと思う。それでも止めずに撫でまわしていたら、ぐす、ぐす、と鼻をすすり始めたので、もうちょっとだからねとなだめたらまた肘で殴られた。ムカつくので乳首を引っかいて黙らせておく。

そうしていじめてはイカせてを繰り返しているうち、僕たちは目的地に到着した。タクシーを下りると、少し駅から外れた立地ながらも、小綺麗なアパートが見える。一つ一つの部屋の間取りは大きそうで、エレベーターから下りても、ひとつのフロアに多くの部屋がないタイプの並びだった。その中の一室の前で、村井君は鍵を取り出して内開きの扉を開ける。

けれども彼は開いた扉と一緒に崩れていって、玄関の所でへたり込んでしまった。これは流石にまずいと無理矢理中に押し込んで鍵を締めると、彼は自分の性器を握って泣いていた。

「ひっ、ッ、も、イキたい、イカせて、お願い...！」

薬の効果も多少あるのか、今日の村井君は積極的だ。いつもならもう少しじめてからじゃないとこういう台詞は言ってくれないのだけれど、今日はおねだりが多い。通常運転の時もこうであったら更に可愛いのにと思うけれど、たまにはしおらしくて愛らしい村井君もいい。

「うん、いっぱい頑張ったね。偉い偉い」

「はぎうっっ！！？あ、や、やめっ、〜〜っ！！あああゝあゝあ...っっ！！」

褒めるついでに、おそらくドライで達していそうな中也よしよししてあげるため、ディルドを膝で押し込んでやった。前方向に逃げるのは予想済みだったので、彼の上にのしかかるような四つん這いになって止める。両手を握って動けないようにしてから、わざと首に息を当てるように顔を傍に持って行って、低い声で囁く。

「タクシーの中でもずっとビクビクしてたね。何回かイッてたんじゃない？」

「ッ、い、ってない、イッてな」

「イッてない？じゃあ本当かどうか確かめてみようか。自分でズボン脱いで？」

「っ、も、いいだろ、家に来たんだから、早く縄といてくれても」

「脱がないなら僕が脱がせてあげる」

「は！？ちょ、まで――！」

口ごたえする彼を無視して、強引にズボンを膝まで下ろした。一緒に下着も下げたので、村井君の下半身が露わになる。すると、むわりと熱気を伴って出てきたそこは、少ない隙間から流れた体液にまみれていた。どろどろのその場所を握ると、びくっと身体を反らすのがなんとも妖艶でそそる。

「すごいドロドロ。出したかった？」

「もう止めろ、出したい、早く、はやっ」

「まあそう焦らないで」

「っくううう.....ツツツ！！！」

先のところを撫でると、身体を丸めて玄関の床を引っ掻いていた。もどかしくてどうにかかなり
そんな身体を抑えきれずに、必死にもがく様子は魅惑的。何度見てもたまらないなと思いなが
ら、人差し指で先端を弄りつつ、双球を揉んで更に追い込む。

「あ、は、ああううう...！！」

「ねえ、ここじゃなくてベッドルームでしょうよ。案内して？」

「ふざ、けんな、連れてくわけねえだろ！」

「え〜？せっかく村井君の家まで来たのに？」

「知るか！家には来たんだからもう十分だろ！」

けれども流石の村井君。ここまで来たんだから、普通の人なら僕に屈服して諦めるところだけ
れど、まだ抵抗する意志が残っているようだ。この期に及んで、どうにか僕を部屋の奥に通さ
ないで帰そうとしているらしい。絶対無理でしょ、何回僕に負けてきたと思ってるのと心の中
では笑っているけれど、あえて今日も最初は彼の提案に乗ってあげる。

だからわざともがく彼を逃がして、その先の行動を見守ってみた。

すると彼は、僕の下から這い出ると、不自由な身体を引きずって玄関近くのドアを勢いよく開
いた。洗剤の香りがするそこは、どうやらバスルーム。

「俺の聖域に入ってくんな！アンタが入っていいのはここまでだ。さっさと一発ヤッて帰
れ！」

ふー、ふー、と息を荒くして涙目で睨んで来る様子は、さながら猫のよう。なんとか僕を追い
返そうと躍起になる姿は面白い。

だけど、僕をバスルームに招いたのは悪手だと思う。

ねえ村井君。初めてのおうちデートにテンションが上がって、準備をしたのは君だけだと思ってる？もし考えてもいなかったとしたら、そもそもそういうところが抜けているんだよ、君はね。

「ッ、ざけんな！聞いてない、なんでそんなの持ってんだ！一発やるだけって言っただろ！」

「一発やる前に、何をして悪いとかは言われなかったよ？」

「俺はさっさと入れて帰れって言った！余計なことしてくんな！」

「じゃあ僕がなるべく余計なことをしなくても入れたくなるように、沢山エッチなところを見せてもらうしかないかなあ」

「ひいいうううっ！！！？あああだめだめ、俺コレ弱いからあああっ！！」

バスルームに案内された僕は、ひとまず従順なフリをしてディルドを抜いてあげた。その後に股間の縄もほどいたけれど、彼が上着を脱いだ後、君が本気で抵抗しても大丈夫なように、この縄で腕だけ拘束させてほしいと頼んでみる。すると村井君は露骨に嫌な顔をして、「え、嫌だけど」と言っていた。けれどもう一回ディルドを入れようとしたら、さっと腕を前に出してきた。その腕を首の後ろに持って行って、手首を縛り上げる。痛い和我儘を言っていたのを無視して、お風呂場に連れて行った。

だけれどここまでは大した抵抗もしてこなかった村井君が、僕が鞆に入れていたガーゼとローションを手を持ってお風呂場に戻ると、ぎょっとしたように目を開いた。案の定逃げようとしたので、腰を抱えて強制的に僕の膝の上に座らせる。

もがく彼を片腕で押さえながら、もう片方の手で洗面器を取って、まずはお湯を入れた。そこにたっぷりのローションとガーゼを入れていると、嫌だいやだと強く暴れ出した。まったく、やだやだばかりで困ったものだ。言葉では嫌がりながらも、実は好きなくせにと、ガーゼを当

てて熱の先端を擦ってみる。すると、想像通りにいい反応を返してくれるんだからエッチで最高だ。

「やあああううう……っ！！あ、あ、だめ、きつ、い、これきつってえ！」

「まだ2回しか擦ってないよ？もっと頑張ってくれないと、まだまだ入れたくならないなあ」

「っ、なら舐める、舐めてその気にさせるからっ！」

「それはまた別の機会に取っておくよ。今日はせっかくお風呂場に呼んでくれたんだから、遠慮なく楽しんで？」

「いや、待って、ホントにだ、あ、〜〜〜〜ッッッ！！ひい、いいいあああっ！だ、め、もおや、あああああっ！あゝ ああああっっっ！！！」

びくん、びくんと僕の身体の上で跳ねるしなやかな四肢は、しっとり汗ばんでいる。やっとイケると期待した彼の熱は、ここでの亀頭責めに悶えて震えていた。出したい、早く出したいとあれ程言っていたのに、今となっては村井君はイクことよりもローションガーゼを止めてほしくて仕方がないらしい。

でもこれほど感じている様子を見せてしまった後で、僕が止めるなんて選択を取るわけがないことも、彼は分かっているんだろう。

「やめでっ！いやっ！やあゝ あゝ あああああっ！！」

「気持ちいいでしょ？ほら、足を広げて？」

「無理っ、もう無理、違うの出る、イキたい、こっちじゃなくてえっ！」

「違うのも我慢しないで出しちゃいなよ」

「ンひいいい……ッッ！！！！だ、め、ダメダメ、っっ、あ、や、っ、〜〜っ！！！」

ー続きは本編にてお楽しみくださいー